

桑原武夫集
2

1946
1
1950

桑原武夫集
2

岩波書店刊行

1946
)
1950

桑原武夫集 2

第二回配本(全十卷)

一九八〇年五月一九日 発行

定価四〇〇〇円

著者 桑原武夫

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三二六五四二一
振替東京六一六二四〇

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 桑原武夫 1980

凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によつた。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀にある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目 次

凡 例

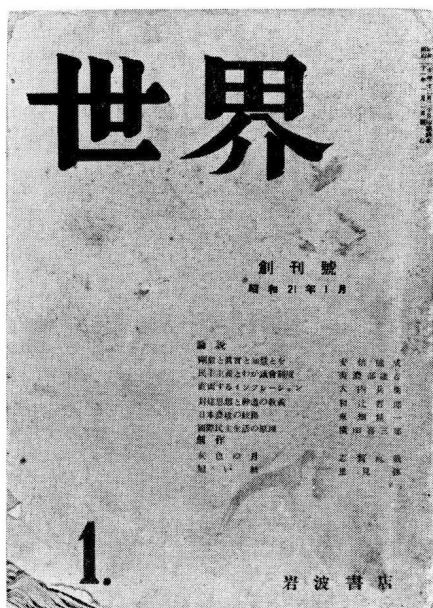
一 五 興	趣味判断	2
	文学修業	6
	日本現代小説の弱点	20
	断 想	33
	ものいいについて	36
	フランスの一左翼作家	42
	ブルデル雑記	55
	文芸俗話	71
	西洋文学研究における孤立化について	91

アランの政治思想	105
第二芸術	124
三好達治君への手紙	143
一五七 短歌の運命	162
洞察について	178
谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン	185
横光利一氏の『秋の日』	191
芭蕉について	199
パリの下宿	223
マルロー研究	229
ずり落ち	318
反訳について	321
文学における伝統	329

	二九六	地方文化私見……………	350
		織田作之助君のこと……………	362
		フランス文学におけるドイツの影響……………	367
		君山先生……………	389
		やむを得ぬ滅亡……………	405
		スタンダールの世界文学賞……………	409
		エコール・サントラル精神……………	412
		仙台を去るにあたって……………	416
	二九七	歴史と文学……………	422
		『イタリア絵画史』のスタンダール……………	436
		レーヴィットの『ヨーロッパのニヒリズム』……………	468
		戦後の宮本百合子……………	474
		伝承問答……………	491

高原の幸福	499
法隆寺の壁画	504
平和の発見	511
文学者と酒	521
人間認識	530
フランス的ということ	534
書評のない国	568
人間の戦い	572
素朴ヒューマニズム	577
読みそこない	586
文学批評について	589
自 跋	609
挿絵目録	633

1946



『世界』創刊号表紙

趣味判断

「価値判断を下すのは科学の任務外に属することであつて、世界観や道德体系などに対する判定は、男子が金髪ブロンドの女を好むか、淡褐色ブロウネの髪ヘアの女を好むかの趣味の好悪と同一列に立つものである」。学校を出たばかりのところ、私は小泉信三博士の著書の中で、この警句を見つけ強い印象をうけた。博士の所説どころか、これがゾンバルドの言であることさえとくに忘れてしまったのに、この警句だけはいまだに覚えてゐるほどである。

こうした言葉が青年の心と与えずにおかぬ悪影響、私もそれから脱け出すのにややひまがかつたが、ただこうした警句が成立するからには、ヨーロッパ人は頭髪の色をよほど重視してゐるに違いないということを覚り、以来小説を勉強するさい人物の頭髪の色に注意するようになったのは一得であつた。そしてヨーロッパへ行つた時もいささか観察を心がけた。ブロンド、ブリュネット、赤色ルウ、栗色シヤイニユ、褐色ブラウン、黒など色をあらわす言葉はなかなか多いが、概して北欧ほど淡く南欧へさがるに従つて濃くなる。そしてパリにはブロンドがなかなか多いと思つた。ところがこの話をするとき、パリに長年生活して諸般の事情に通暁してゐる高田博厚君が訂正してくれた。パリジエンヌの金髪

には、せが多い、薬品で処理しているのだという。そういえば年若い女に金髪の率が多いようだった。してみるとプロンドの好みが勢力を得てきているということになるのであって、これをそのころ（一九三七、八年）フランス人中にジャズやスポーツを好むものがだんだんふえ、アングロサクソン趣味が勢力をましつた事実と結びつけるのは早計かもしれぬが、ともかく、めいめい勝手気ままと思われる個人の好みそのものが、やはり時代的、社会的に大きく規制されていることだけは疑えないのであった。日本でも、奈良時代には唐文化の影響下に薬師寺吉祥天風の豊頬の美人が重んぜられたが、いつしか瓜実顔を尊ぶに至っている。そして同じく変遷するにしても世界観や道徳体系などというものは、理論理的なものが多いだけに、指導や強制が直接にひびくのに対して、容貌の好みはいちいち反省を加えるものではなく、理性よりも意識下のものに動かされるだけに、その変遷にはかえって何か正直なものが現われているのではないかと思つた。

日華事変以来、あらゆる西洋的なものが排斥され、すべてが日本的になつたように見えたが、私はそれをあまり信用しなかつた。それはいわば海流の表面の波であつて、それがいかに東へ東へと立ちさわいでいようと、大きな底流は不斷に西へ西へと流れているのではなからうかと思つた。日本人は、少なくとも日本の青年たちは、西洋排撃の怒号の下に西洋に慣れていたのである。彼らの舌は日本思想を語りつつ、日本料理よりも遙かに西洋料理を好んでいた。そして容貌の好みも西洋のスター、また日本人のうちでも比較的西洋風の顔に向いつつあつた。容貌には必ず化粧が不

可分的に結びついているが、そのメーカーシップの好みは西洋風になるのである。頭髪を過酸化水素で赤く染めるような露骨なことは戦争中なくなったが、パーマネントは終戦まで抵抗をやめなかった。青年たちは古典的な日本鬘に漸次美を感じなくなり、明治大正ごろの名妓の写真などを見せてもさして感興を起さない。私はこの事実を面白く思い、プロマイドでも使って統計をとって見たらなどと、よく人に話したが、みんなまた冗談が始まったという顔をした。

ところが友人の生物学者、今西錦司博士が蒙古をくまなく民俗調査して帰って曰く、君の説を少しばかり実験したよ。今西君は乗船まぎわに私の雑談を思い出し、映画女優のプロマイドを十枚ばかり買求め、これを包に住む蒙古人たちに示して美人を選ばせてみたという。ただ今の今西君が女優の名前などは一向に不案内な上に、その材料を人に与えて帰ったりしたので、「科学的」調査にはならないが、ともかく蒙古人たちの好みはほぼ一定しており、プロマイドの女優のうちで西洋風な顔はすべて斥けられ、必らず比較的古典日本的なある女優が選ばれたが、彼らはこの美人は日本人ではなからう、漢人に相違ないと主張したそりである。この事實は、色々の宣伝にかかわらず、蒙古において日本文化が全く無力であり、またもとより西洋の影響はありえず、いままも中国文化が支配的であって、蒙古人はこれを崇拜していると考えられる、その一例証になるのではないかと私たちは思った。

金髪を好むか淡褐色を好むか、そこにも一定の法則があり、それを知ることが案外科学の任務と

なる日が来ないものでもない、と私は時おり空想する。そして、東北大学所蔵の狩野亨吉文庫には明治以来の美人の絵葉書が丹念に揃えられているというが、この碩学は何を考えてこんな蒐集をしたのだろうかと思ったりする。もつとも私はそのコレクションをまだ見ていない。

(一九四六年一月、『世界』)

文学修業

やあ失敬。まあ火鉢のそばへ寄りたまえ。何も無いが、お茶だけはちょうど昨日ヤミ市で買つて来たから、それでも飲みながら話そう。実は『新潮』の編集部から若い人々のために「文学研究法」というのを書いてくれといわれたが、これは大へんな問題だ。僕も大学でフランス文学の教師をしている以上、文学の研究法については自分としての考えもないわけではなく、また今までのやり方に不満な点もあり、ここで考えなおさねばならんと思うのだが、それはいささか専門にわたり、フランス語、ひろくいつて外国語の読めない君たち、——失敬だがそうじゃないかな——西洋文学史の知識の余りなさそうな君たちに話してもどうかと思われるし、それには僕も若干準備がいる。それに近ごろちよつと忙しいので、編集の方に頼んで君たちに宅へ来てもらうことにしたんだ。そして君たちの話もきき、僕も思いついたことを気楽に話そうというわけだ。もつとも僕は饒舌だから、ぼく一人しゃべってしまふ危険が多い。時々チェックしてくれたまえ。

編集の方の紹介状によると、君たちは作家志望、でなくとも文学を勉強したい人々だとあるが、そうですか。ところで今までどんな本、文学の方でだ、どんなものを読んだのだろう。工場行きと

戦争でひまがなかったって。それはそうだろうが、何か読まなけりゃ文学が好きになるわけはないじゃないか。……なるほど、それらはみな現代作家だね。もう少し前のものは？ 漱石。これは君たち残らず読んでいるんだね。僕の所などへ遊びにくる理科方面の連中でも漱石だけは読んでいろいろの文句をつけてみても、漱石はやはり偉かった、という証拠だね。人間の一人々々は実に間違いやすいものだが、人間全体、ヒューマニティは決してあやまたない、よいものは必らず残り、必らず読まれる、平凡な説のようだが真理だ。またこの真理があればこそ、お互いに文学に本気になれるのじゃないか。もつとも、そういうことは、永久に愛読されるような優れた作品を作った当の文学者が、いわゆる「永遠の相の下に」世界を見たということにはならない。永遠の相などというのを初めから考えていると、実はマンネリズム、悪いアカデミズムになりやすい。実相観入などという言葉も十分注意を要するね。僕はむしろゲーテのいったように、偉大な作品はすべて際物、といったは誤訳かしらんが、必らず現実の環境の中から生まれると信じている。むしろ現在の相の下に、だ。生きている人間は永遠などに誠実になれるものではない。ただ真に現在に誠実に生き、書く、そうした誠実の士が後の人々をも必らず打つ、それを永遠の相などというだけのことだ。

ところで漱石だが、君たちは雑文や日記や手紙なども読んだかしら。まだだって。ぜひ読みなたまえ。漱石の手紙は考えようでは小説よりも面白いから。それに漱石にかぎらず、誰でもいいんだが、ある大作家に興味をもつたら、その全集を全部読んでみることに、これは是非すすめたい。その作家

が好きになつてゐる以上これほど面白いことはないし、それよりも、そこに一人の大芸術家と同時に一個の人間を捉えることができる、文学研究の第一歩といつてもいい。僕自身学生のころフロベールの全集を、小説は少年期のものから全部、十冊もある書簡集までみな読破した。そのころ書いたものを今みると、この作家を一こうに把握できていないので冷汗が出るが、毎日少なくとも八ページずつ、がむしゃらに読んで行つたあの血気はいま思いかえしても好ましい。大部分忘れてしまつたが、無駄だつたとは決して思わない(余談になるが、本は読んで忘れて一こう差支えない。忘れるから読まぬなどというのは卑怯者のいうことだ。本当に自信のある人間は読むしりから忘れてゆくはずだ。ちやうど君たちの来る前にアランの政治論を読んでいたら、ジャン・ジョレスのことをほめて、こう書いている——彼はすばらしい教養をもっていた。彼はあらゆるものを読み、あらゆることを知り、あらゆることを忘れ、鍛錬された精神のみを残した、と。本当の教養人とはこういうものだろう)。そういうふうに大作家の全集を読むということは、直接文学の勉強になる他に、その当時の社会がどんなものであつたか、もちろんそこにその作家の目の歪みが伴うが、却つてそれだけに無色透明な何々時代史などというものより、その時代の空気がよくわかるはずだ。日本の歴史家はこんな反省をしたことがあるかしら。西洋史の連中でそんなひまのかかる仕事をやっている人は知らないが、たとえば明治時代を研究する歴史家でも、根本資料といつてよい明治文学をどれだけ味読しているか、怪しいものさ。また横道へそれそりになつた。

僕らは学者になるんじゃないやありませんからだって。実は君らが来たらそこを話そうと思っ
ていたんだ。日本の小説家の最大の欠点の一つは不勉強、まあはっきり言えば無学だということだ。
さつき君たちのあげた人々だって芸はうまいが、そうとう無学だよ。例をあげてみるって。いくら
もあるが、例えばだね、ある一流の大家が豊臣秀吉の手紙のことを書いて、それに大へん感心して
いる。感心は僕も賛成だが、秀吉は普通人が一ばん最後に書くようなことを、手紙の冒頭から書い
ていると驚いて感服している。昔の手紙は、和歌などでもそういう書き方があるが、紙の最初に余
白をおいて書き出し、最後にその余白のところへもどって書くものなのだ。そんな程度の常識すら
なくて、平気で秀吉の手紙の文体などというのはメチャとでもいうより他にいいようがないじゃな
いか。

学者を軽蔑するのはいい。また軽蔑に値するのが決して少なくないし、ともかく筆一本で独立自
尊でやっている文学者から見れば、もちろんひどい待遇だが、ともかく多少とも国家から保護され
てきた学者でだらしのないのに腹の立つのも当然だ。もし同じ程度の仕事をしたとすれば、僕は文
学者の方を尊敬する。しかし学者は黙殺してもいいが、学問は黙殺できない。あなたの訳したアラ
ンの中に、博識ほど弱いものはないとあったって。これは参ったね、それはそうさ。しかし、そう
いうことができるためには一おう博識の何たるかを知って、それから学問を乗越えるのでなけりゃ、
たとえばジッドが、若いころ一日に一冊本を読了せねば眠らぬといったふうに勉強しながら、デザ